Spiritualism News Letter
スピリチュアリズム・ニューズレター

2009
新年号
（第44号）
1月1日発行

発　行／スピリチュアリズム・サークル 心の道場
発行人／小池里予
〒441-3141 愛知県豊橋市大岩町字北山468-1
TEL 0532-41-0537　FAX 0532-41-8257
ホームページアドレス　http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/

今号の内容

・神秘のベールに包まれている“天使”の実像
スピリチュアリズムの天使論――2 …… 1
・スピリチュアリズムによって初めて明らかにされた“真実のイエス像”
スピリチュアリズムが教えるイエスの真相――1 …… 17
・第7回　公開ヒーリングを終えて …… 31

神秘のベールに包まれている“天使”の実像

スピリチュアリズムの天使論――2

先回のニューズレター43号では、スピリチュアリズムの天使論の前半を述べました。今回はその後半です。天使の実像については謎のベールに包まれ詳細は明らかにされていませんが、スピリチュアリズムによって示された範囲で述べていきます。

内容は次のようになっています。

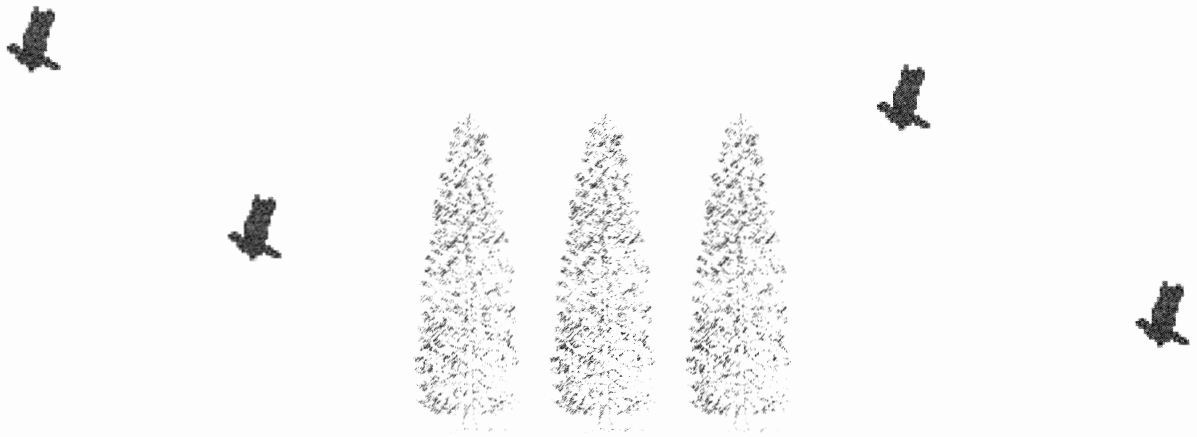
8 ‖ 天使とイエスとスピリチュアリズム――高級天使イエスの受肉（人間化）

9 ‖ 天使の存在と多神教の成立

10 ‖ ユダヤ・キリスト教における天使たち――異郷の神々を天使として取り込んだ天使論

11 ‖ キリスト教の「堕天使悪魔説」――人類史上最悪の天使論

12 ‖ 天使に関する諸説と天使ブームの間違い



8 ‖ 天使とイエスと スピリチュアリズム ——高級天使イエスの受肉（人間化）

スピリチュアリズムによって明かされた地球人類の最大の秘密

スピリチュアリズムの到来によって、地球人類にはこれまで封印されてきた地球に関する最も重大な秘密が、初めて明らかにされることになりました。長い間、地球人類に隠されてきた奥義（おうぎ）を知ることが、ついに許されるようになったのです。

その秘密とは、これまでキリスト教の創始者とされてきたイエスについての内容です。実は“イエス”は、地球人類を霊性進化の道へと導き、人類を救済するという目的のために高級天使が受肉し、地球の人間として誕生した存在であったのです。耳を疑うような、あまりにも突拍子もない話に唖然（あぜん）とされるかもしれません。想像を超えた、いかにも馬鹿げた作り話のように思われるかもしれません。しかし、これは事実なのです。

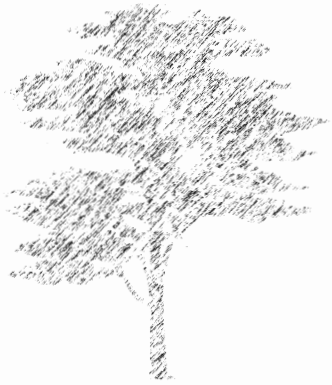
高級天使イエスの受肉（人間化）

神の王国の役人である天使が、人間に生まれ変わるというようなことは、めったにありません。しかしごく稀なことですが、これまでの地球の歴史には、そうした事実が存在します。天使の受肉（人間化）というきわめて特殊な出来事の中で、特別に際立ったケースが、2千年前の高級天使イエスの受肉であったのです。これは人類の歴史上、最も重要な出来事です。前にも後にも、これほど重要な出来事は存在しません。

イエスの受肉の目的は、地球人類を救済することでした。では、なぜイエスは高級天使のままで「地球人類の救済」に携わることができなかったのでしょうか。そこには「神の摂理」に照らしてみたとき、どうしても人間として生まれなければならない理由があったのです。その理由は、天使と人間の立場の違いにあります。

天使の立場は、どこまでも神の王国の役人であり、その役割は住民である人間を外部から管理することでした。天使は、人間の霊的成長の歩みに直接関わり手助けをして導くようなことはできません。それができるのは地球を卒業した人間の霊に限られます。天使の任務は、人間が摂理にそって行動したときには善い結果をもたらし、摂理に反したときには修正の道を示すということです。神に代わって人間に褒美（ほうび）を与えたり、罰を与えることが役目であって、人間の歩みに手を貸すことはできないのです。

もし、どうしても人間に手を差し伸べて、その成長を助けたいというのであれば、自分自身が人間にならなければなりません。それは天使としての立場を捨てて、人間に生まれ変わるということです。神の王国の役人を辞めて、王国の住人になるということです。イエスは、こうした理由によって高級天使の立場を捨て、人間として生まれ変わる道を選んだのです。



人間としての生き方の見本を示す

高級天使イエスは、人間として生まれ変わることにより、地球人類の救済に直接関わりを持つことができるようになりました。人間となることによって「自己責任の摂理」のもとに自分自身を置き、人類救済の道を進めることができるようになったのです。しかしそれは同時に、イエスに大きな犠牲と負担を強いることになりました。

“受肉”ということは、重苦しい物質の中に魂が閉じ込められた状態で、不自由な肉体を道具とするということを意味します。それは誠意が常に裏切られる物質的環境に身を置いて、人間と同じように物質世界の苦しみを体験しなければならないということなのです。そうした厳しい環境の中で摂理に適(かな)った生き方を貫いたとき、初めて地上人に対して霊的人生の見本を示すことができるようになります。そして地球人類にとって、自分で自分の魂を救う道、自分たちの世界を救う道が開かれることになるのです。

イエスによって始められたスピリチュアリズム運動

今、地球人類に救いの道を提示し、地球人類全体の運命を変えつつある“スピリチュアリズム”は、その大もとをたどると高級天使イエスに至ります。一人の高級天使が地球人類を救済するために受肉し、人間イエスとして誕生したという歴史的事実に行き着きます。

地球人類は、イエスという高級天使が身を挺(てい)して起こした救済活動によって「霊性進化の道」を出発することになりました。霊界では、地球人類救済のために総動員体制がしかれ、イエスを頂点とする巨大な組織（ヒエラルキー）がつくられました。そして現在も、イエスをはじめとする地球出身の高級霊たちの主導のもとに、その計画が進められています。

『霊訓』に見るイエスの受肉の特殊性

インペレーター霊は、イエスの受肉の特殊性について次のように述べています。

> キリストの場合は、かつて一度も物質界へ降りたことのない高級神霊が人類の向上と物的体験の獲得のために一時的に肉体に宿ったものです。そうした神霊は高い界層に所属し、人類の啓発のために特殊な任務を帯びて派遣されます。
>
> （続霊訓・46）

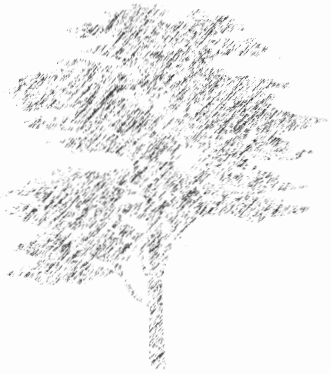
> イエスはずっと、その使命達成に意欲と愛を寄せる天使の一団からの指示を受けていた。イエスは、常に霊界と連絡を取っていた。その身体が霊の障害とならなかっただけ、それだけ自然に天使の指導を受け入れることができたのである。
>
> 地上の救済のために遣わされる霊は、そのほとんどが肉体をまとうことによって霊的感覚が鈍り、それまでの霊界での記憶が遮断されるのが常である。だが、イエスは例外であった。その肉体の純粋さゆえに霊的感覚を鈍らされることがほとんどなく、同等の霊格の天使たちと連絡を取ることができていた。天使たちの生活に通じ、地上への降誕以前の彼らの中における自分の地位まで記憶していたのである。
>
> （霊訓下・183～184）

※『霊訓』については翻訳原文の文体・表現を改めています。

イエスを中心とする高級霊界での“大審議会”と天使の参加

今この時も、地球人イエスを総指揮者として「地球人類救済プロジェクト（スピリチュアリズム）」が進められています。その大計画は、地球圏霊界のすべての霊たちの力を結集して推進されています。スピリチュアリズムでは、年に2回、地球圏霊界の上層においてイエスを中心とする大審議会が開かれます。そこにはスピリチュアリズム運動の責任を担い、指導的立場で携わっている高級霊たちが呼び集められます。この大審議会については、シルバーバーチが繰り返し述べていますので、ここでは詳細は省略します。

さて、その大審議会には高級霊（人霊）ばかりでなく、地球を管理する役目を持った高級天使たちも列席します。天使たちは、オブザーバーとしての立場で大審議会に参加するのです。スピリチュアリズムを進める主役は人間自身（地球出身の霊たち）ですが、天使は摂理の執行者として、側面から人類救済計画に関わることになるのです。



9 ‖ 天使の存在と多神教の成立

霊界の天使たちを霊視していた太古の人々

物質文明が現在ほど支配的でなかった古代の地球人類は、現代人よりもずっと霊能力を発揮していました（＊霊能力の有無が、必ずしも霊性の進歩のレベルを示しているわけではありません。霊性のレベルとしては、かつての地球人よりも現代人の方が全体的に進んでいます）。

古代人の多くが、霊界の天使たちを霊視することができました。霊界の至る所に存在する、光り輝く天使たちの姿を認識していたのです。

多神教の形成
――天使を神々とする信仰の成立

天使は、地球に人類が登場する遥か以前に誕生し、進化の道を歩んでいました。そうした天使たちに対して、進化の歴史が浅く未熟な霊性レベルにあった地球人が、脅威と恐れを抱いたとしても不思議ではありません。人々は、人間の霊とは違って目映（まばゆ）いばかりに光り輝く天使たちを“神々である”と思うようになりました。そして天使たちを畏（おそ）れ崇拝し、信仰の対象とするようになったのです。こうして地球上のさまざまな地域に「多神教」が形成されることになりました。

多神教は、一神教（ユダヤ教・キリスト教・イスラム教）からは、原始レベルの宗教と見なされます。しかし心霊学的知識に照らしてみると、それはキリスト教などの一神教よりも多くの点で「霊的事実」に忠実であり、内容的に正当性を持っていることが分かります。

神と天使の区別
――「一神教」と「多神教」の線引き

時代が進み一神教の宗教が形成されるようになると、そこでの信仰対象は「唯一の神（エホバ・ゴッド）」だけに限定されることになりました。そして、それまでの天使たち（神々）との間に明確な区分がなされるようになったのです。神―天使界―人間界という３界層の関係の中で天使界は位置づけされ、神と神々（天使たち）との間には一線が引かれることになりました。天使は、神と人間との中間にあって、仲を取り持つ存在（神の御使い）と考えられるようになりました。こうして「一神教」のもとで、天使たちを信仰の対象とする多神教は排斥されるようになっていきます。

しかしカトリック教会の中では、神（ゴッド）への信仰と並行して、熱心な天使信仰も存在しました。唯一神信仰のもとでも、天使への崇拝の念は人々の間に根強く生き続けたのです。そして中世を経て宗教改革の時代を迎え、天使を信仰対象とする多神教的姿勢が厳しく糾弾されるようになっていきます。

日本の神道の神々とは
――天使を神々とした純粋な多神教か？

日本の神道は、しばしば多神教の代表のように言われます。しかし日本の神道が、果して天使たちを神々と認識したところに成立した純粋な多神教であるかどうかについては、多くの疑問が付きまといます。古代の日本では、地方の豪族ごとに“守護神”が祭られていました。その大半が天使を霊視したところに成立したものと思われます。それと同時に、氏族の先祖の霊たちが“祖霊（氏神）”となって子孫を守護するという祖霊・氏神信仰も存在していました（＊天使信仰と先祖霊信仰が並列して存在していたということになります）。古代社会は祭政一致が当たり前であり、守護神・氏神は、氏族を代表する存在と見なされてきました。

やがて大和朝廷の前身である一有力豪族が、各地方の豪族を徐々に支配していきます。その勢力拡大の過程で、支配下に収めた各豪族の守護神を、自分たちの守護神（天照大神）のもとに従属させる必要が生じるようになります。そうした政治的意図のもとに、人工的につくり出された宗教が「神道」だったのです。神話（古事記）の中には、大和朝廷の守護神（天照大神）を頂点とする神々の体系が示されています。そして神話によって、大和朝廷の王が日本を治めることが正当化されています。

神道の中には多くの神々が登場しますが、それらは霊視によって認識された天使たちの実際の世界ではありません。各地方の豪族のもとで行われてきた信仰では、天使が神々として崇拝されていた可能性は十分考えられますが、神道という人工的宗教において登場する神々は、必ずしも天使たちを表したものではありません。心霊学の観点からするなら、神道は純粋な多神教とは言えません。

10 ‖ ユダヤ・キリスト教における天使たち ——異郷の神々を天使として取り込んだ天使論

天使となった異教徒の神々

旧約・新約聖書の中には、天使に関する記述が見られます。その多くが、異教徒の伝説から借用したものであったり、単なる人間の作り話であったりします。

聖書に登場する天使のルーツをたどると、ユダヤ教の中に取り込まれた異郷の神々と、その神話伝説に行き着きます。この辺りの事情は、日本の神道における神々（＊神話に登場する八百万（やおよろず）の神々）のケースときわめて似ています。古来より地球上の各地には神話が存在し、その神話に基づく宗教と政治が行われてきました。聖書に登場する天使たちは、こうした各地の神話に由来しています。

聖書に登場する天使の中で最もよく知られた存在は、ミカエルとガブリエルです。これにラファエルとウリエルを加えて“四大天使”と呼ばれています。これらの天使たちに共通する“エル”という語尾は、聖書で天使と呼ばれている存在が、元来異郷の神々（エル）であったことを示しています。ミカエルという名称はカルデアの神、ガブリエルはシュメールの神に由来すると言われます。異郷の神々は、聖書の中で天使として重要な脇役を果たしていくことになります。

天使を教義の中に取り込んだキリスト教

西暦325年のニケーア公会議で、教会は天使をキリスト教の教義に含めることを決定しました。ここからキリスト教における「天使信仰・天使崇拝」が始まることになります。キリスト教にとって、天使は重要な存在となりました。その後、中世神学において天使論の大成を見ることになり、天使崇拝は頂点に達するようになります。キリスト教で説かれている天使の内容は、霊的事実に基づくものではありません。その多くが人間の推測の域を出ないものです。

しかし、そうしたキリスト教の天使論の中にも“スピリチュアリズム”から見て正しいものが含まれています。中世において体系化された天使論では、天使の世界が壮大なヒエラルキー（階級世界）であることを述べています。この点は、まさに事実を言い表しています。もちろんヒエラルキーに関する具体的な内容や天使の名称については間違っていますが、天使を神と人間との媒介者であり、天使を人間よりも神に近い存在としている点については、ある面では正しいと言えます（＊イスラム教では、天使の存在を信仰教義の中に組み込んではいるものの、その位置を人間よりも低いとしている点でキリスト教とは違っています）。また人間は神の前に直接出て行くのではなく、天使を介して神と通じるということを述べていますが、その点においてもキリスト教は正しい見解を示しています。

プロテスタンティズムの天使観

中世において一世を風靡(ふうび)した天使崇拝は、宗教改革によって登場したプロテスタンティズム（新教）から厳しく弾劾(だんがい)され排撃されることになりました。プロテスタンティズムは、天使崇拝に見られる異教性・異端性をキリスト教的ではないとして強く否定しました。プロテスタンティズムは、どこまでも神中心の信仰のみを主張し、天使崇拝を間違ったものとしたのです。

崇拝の対象者・祈りの対象者は“神のみ”というプロテスタンティズムの主張は、スピリチュアリズムと同様の見解に立っています。ただしスピリチュアリズムでは「霊的事実」に基づいて神の代理者としての天使の存在と働きを認め、その重要性を主張する点で、プロテスタンティズムとは一線を画しています。

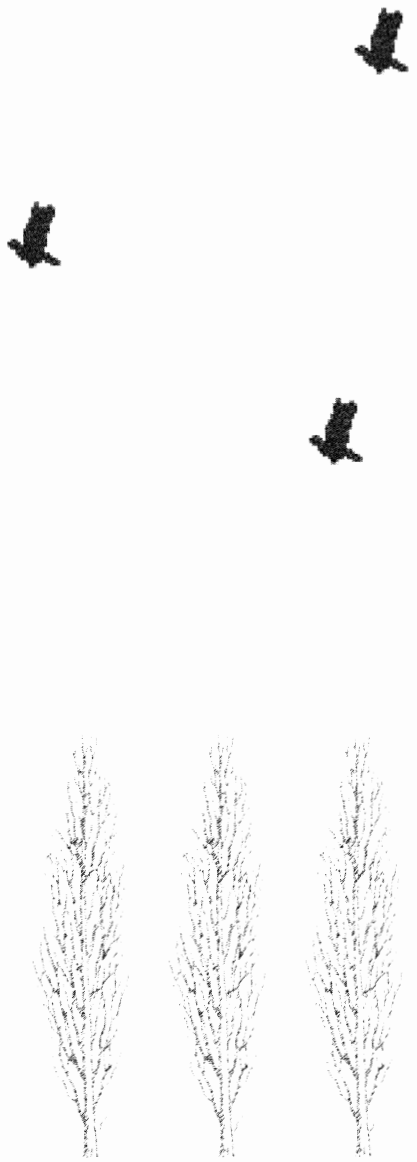
高級霊（指導霊・背後霊）と天使の混同

天使と人間との交わりは現実の出来事であり、すでに述べてきたように人間は絶えず天使の影響を受け、その支配下にあります。天使の存在しない所、天使と関わりのない営みはありません。スピリチュアリズムにおいては、天使の導き・働きかけは、歴史的な一時(いちじ)の出来事・特別な出来事ではなく、日常における当たり前のことなのです。

さて、天使の存在を重視するキリスト教社会（特にカトリック）の中では、天使はさまざまな場面で人間の前に登場します。天使からの啓示や導き・助けは、クリスチャンにとっては、ある種の憧れであり、信仰生活上の記念すべき出来事です。しかしキリスト教社会において天使の働きとされてきた内容の大半は、実際は天使ではなく、高級霊（指導霊・背後霊）によるものでした。高級霊の声を天使の声と勘違いしたり、窮地における高級霊の援助と導きを、天使の働きによるものと間違って理解してきたのです。

天使は神の王国の役人として、安易に人間に手出しできない立場にあります。天使は摂理の番人であって、背後霊・守護霊のように地上人を直接導いたり、守護することはありません。

キリスト教の中には“天使の声を聞いた”という多くの聖職者の逸話が残っていますが、実際には天使ではなく高級霊の声であったと考えるべきです。ジャンヌ・ダルクや聖フランチェスコは天使の声を聞いたとされていますが、それも同様のことなのです。またイエスの誕生に際して、ガブリエル天使がマリアに受胎を告知したということになっていますが、もし本当にマリアが声を聞いたとするなら、それはガブリエル天使ではなく、人間の霊の声であったということなのです。



11 ‖ キリスト教の「堕天使悪魔説」——人類史上最悪の天使論

人類に対する“最大の罪”

キリスト教が人類に対して犯してきた最大の罪の一つが、「堕天使悪魔説」という間違った教義をつくり上げたことです。この霊界の事実から懸け離れたフィクションとしか言いようのない教義に、地上人類は洗脳され、翻弄（ほんろう）されてきました。キリスト教によってつくり上げられた罪なる教義は、長い間、人類を不幸の中に陥れてきたばかりでなく、現在の宗教にも影を落とし、多くの人々の不安を煽り、狂信へと駆り立てています。

しかし人類にとって最大の敵とも言うべき「堕天使悪魔説」は、スピリチュアリズムの登場によって今や根本から覆されようとしています。キリスト教は、根幹となる教義の崩壊によって“存在価値”そのものが疑われるようになっています。

堕天使伝説

旧約聖書の冒頭にある『創世記』には、人類の先祖をサタンが誘惑し堕落させるという話が載っています。「サタンはもとは天使であったが、神の掟（おきて）に背いて人間を誘惑し、ここに人類の原初の罪が発生するようになった。これが“原罪”と呼ばれるもので、その罪は人類全体に及び、人間は“罪人”としての宿命を背負うことになった。そして神の掟に背いたサタンは、天国から追放され地獄に行くことになった」——以上が有名なサタン伝説・堕天使伝説のあらましです。サタンとなった天使は“大天使ルシファー”と同一視されています。この大天使はあらゆる天使の中で最高位にあり、特別に光り輝く存在であったと言われています。

“天使が堕落する”という話のモチーフは、異教の伝説の中にも存在します。善なる神（善神）に反対する悪なる神（悪神）という構図は、ユダヤ・キリスト教以外の他の宗教にも存在します。こうした「堕落天使伝説」は、ダンテの『神曲』やミルトンの『失楽園』によって、広く地球上に知られることになりました。

さて、キリスト教神学では「堕落天使の“罪”とは何であるのか？」が議論されました。そして、いくつかの説が登場しました。その代表的なものが、情欲説であり傲慢説であり自尊心説です。また嫉妬説や性交説まで飛び出しています。

しかし摂理の執行者たる天使が、摂理に背いて神に反する悪感情（傲慢さ・虚栄心・怒り・嫉妬・情欲）を持つようなことはありません。なぜならそうした利己的な悪感情は、肉体を持った人間にのみ発生するものだからです。肉体本能から発する感情は利己的となり、霊の心から発する感情は利他的となります。この相反する感情が、内面（心の中）で衝突するようになるのです。これが地上人の“内面葛藤”の実態ですが、肉体を持たない天使や高級霊たちには、こうした葛藤はありません。人間は死によって肉体を捨て去ると、悪感情は短期間で消滅するようになります。

そうであるのに一度も肉体を持ったことのない天使、しかも高度に進化した大天使と言われる存在が、どうして地上の人間のみが持つ利己的感情を所有するようになったのでしょうか。それは天使に関する霊的知識がないために、勝手に自分たち地上人を基準にして天使を邪推した考えにすぎません。“天使の堕落”というような出来事そのものが、実際にはあり得ないことなのです。

キリスト教による「サタン魔王説」の強調

旧約聖書の中では、サタンは地獄に追放されたとするものの、神に対峙するような悪の一大勢力の長としては登場していません。神に敵対する勢力の首領（魔王）としてのサタンは存在していません。

それがキリスト教の時代になって、サタンは大きく様変わりし「悪魔の首領（魔王）」として強調されるようになりました。世界は神の支配する善の勢力と、魔王（サタン）の支配する悪の勢力に二分され、この間で激しい戦いが展開するという構図ができ上がりました。そして“ミカエル天使”が善の勢力の代表としてサタンと戦うということになります。

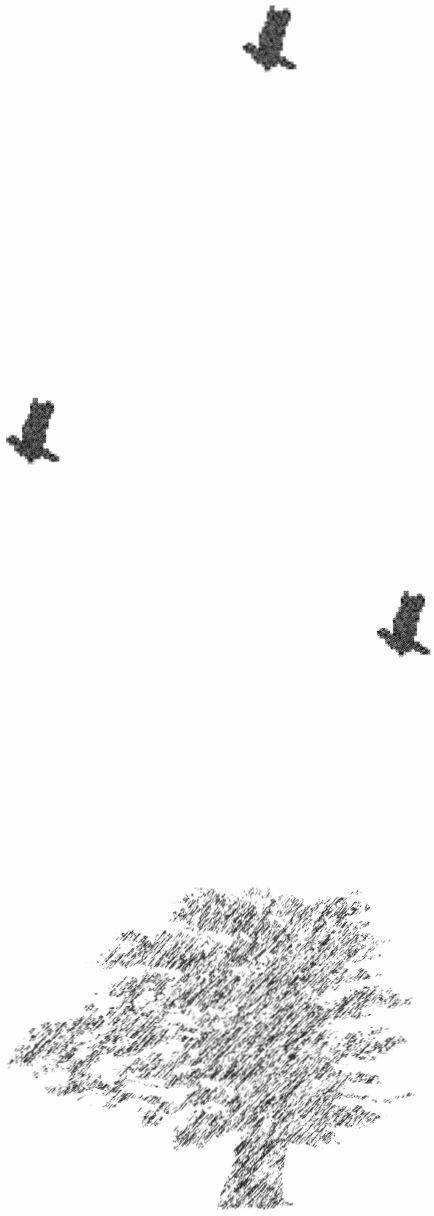
キリスト教会は、自分たちへの反対者・対立者をサタンの勢力と見なし、敵視していきます。自分たち以外は皆、サタンであるといった方向にエスカレートしていきます。キリスト教会は、物欲とエゴと間違った教義のもとで腐敗堕落の道をたどり、やがて善良な人々に対する不当な迫害を始めるようになりました。中世における恥ずべき“魔女狩り”はこうして起こされ、教会にとって都合の悪い人間を“悪魔の手先”として抹殺することになったのです。教会への反対者や霊能者には一方的に“サタン”のレッテルが貼られ、残酷な拷問が加えられました。

こうしたキリスト教会の狂信的蛮行は中世だけの出来事ではなく、つい最近に至るまで行われてきました。現代の多くのキリスト教社会の中でも、霊的現象は依然としてサタンの仕業と見なされています。霊能者はサタンの手先と決めつけられ排斥されています。そして最大の非難・攻撃の矛先が“スピリチュアリズム”に向けられているのです。

「サタン魔王説」を悪用した洗脳と恐怖の支配

霊的世界のことは一般の人間には分からないのをいいことに、キリスト教会をはじめとする多くの宗教では、デタラメな教義を平気で信者に強いてきました。また教義に異論を唱える者にはサタンのレッテルを貼り、非難・迫害の手段に出てきました。人々はサタンに対する恐れと、教会の権力に対する恐れという二重支配の中で完全に洗脳され、それ以外の考え方ができなくなりました。

その結果、本来なら人間の霊的成長を促すべき宗教が、霊的成長を真っ先に阻害・妨害する最悪の存在になってしまいました。2千年もの間、キリスト教は地上人類に対して卑劣な洗脳を行ってきました。そして現在の多くの宗教も「サタン魔王説」を悪用して洗脳を行っています。



スピリチュアリズムによる「堕天使サタン説」「サタン魔王説」の打破
——霊界にサタンはいない

霊界主導によって展開されているスピリチュアリズムは、地上人類を恐怖と洗脳の中に陥れてきた「堕天使サタン（悪魔）説」と「サタン魔王説」を根本から否定します。霊界の高級霊からの通信によって、これまでキリスト教で説かれてきた教えが間違いであり、作り話にすぎないことが明らかにされました。

スピリチュアリズムは「霊的事実」を根拠にして、キリスト教の罪観・救済観を完全に否定しました。霊界にはサタンというような“堕落天使”は存在しません。堕落の結果生じたとされる“原罪”も存在しません。そして魔王（サタン）を中心とする“悪の一大勢力”も存在しないのです（＊幽界下層にたむろして悪行をなす“低級霊”は存在しても、魔王（サタン）のもとに結集して神に対峙・対抗する悪の組織的勢力は存在しません）。

> 悪の軍団とは、このような未発達・未熟な霊のことであり、それが親和力の働きによって聖なるもの・善なるものへの反抗心のもとに結束する。（中略）こうした低級霊が実に多い。そのすべてが我らの敵である。——（質問）その首謀者というべき“悪魔”がいるのでしょうか。（答え）彼らを扇動する悪玉はたくさんいる。しかしキリスト教神学で説くような“悪魔”は存在しない。（霊訓上・33～34）

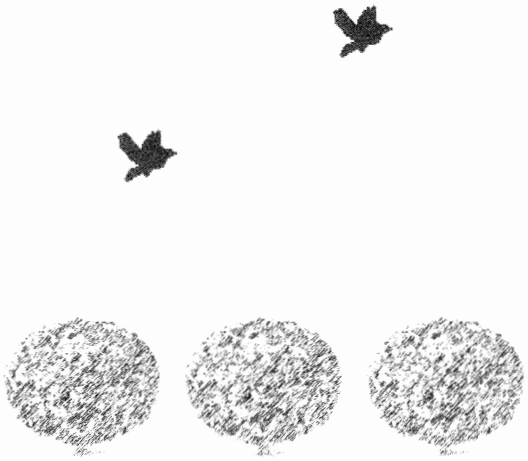
> 想像上の産物にすぎない悪魔の問題で心を悩ますのはやめることである。真摯な心の持ち主、純真な心の持ち主、誠意ある心の持ち主にとっては、神学がまことしやかに説く悪魔も魔王も存在しない。（霊訓上・160）

> かつては異常行動をする者はすべて“悪魔の憑依”とされた。が、“悪の化身”という意味での“悪魔”は存在しない。霊性の進化の程度が低いという意味での低級霊で、その発想に邪悪な要素が強いというにすぎない。（霊媒の書／現象編・212）

> 組織的犯行といっても、聖書にあるような天界から追放された堕落天使の反乱の話を想像してはなりません。あれは象徴的に述べられたまでです。（最高の福音・236）

> ——（質問）悪魔はキリスト教が生み出したのでしょうか。（答え）そうです。自分たちから見て悪と思えるものを何とか片づけるためには、そういうものを発明しなければならなかったのです。（シルバーバーチ5・154）

※こうした「霊的事実」に照らしてみると、キリスト教が虚構の上に築かれた人工的な宗教であることが分かります。もちろんキリスト教の中にも、誠実で真摯な求道者・信仰者はたくさんいます。しかしシルバーバーチが強く非難しているように、キリスト教は今日まで間違った教義で人々の魂を牢獄に閉じ込め、霊的成長の道から遠ざけてきた地上に存在してはならない宗教と言えます。



「堕天使サタン説」「サタン魔王説」に洗脳された人々

教義による宗教的洗脳は人間の潜在意識にまで及び、すべての思考や判断を強く支配するようになります。“信仰”とは、教義による洗脳プロセスと言っても過言ではありません。宗教教義による洗脳は、目の前の出来事から世界情勢に至るまで、何から何まで教義に当てはめて判断し解釈するような意識をつくり上げます。

堕天使サタン説・サタン魔王説に洗脳された信者は、自分の周りに生じるトラブルのすべてを“サタンの仕業”と考えるようになります。自分に反対する者はサタンであると決めつけ、サタンが働いて自分を神から引き離そうとしていると思うようになります。

そうした状況は“低級霊”にとって願ってもないチャンスです。地上人をからかい、騙し、悪事を働く絶好の機会として働きかけます。低級霊は、いろいろな心霊現象を引き起こしてはサタンの仕業であるかのように見せかけ、恐怖心を煽って面白がります。単に低級霊がからかっているにすぎない出来事も、間違った教義に洗脳された人間には、すべてサタンの仕業として映るようになるのです。

地上でサタン実在説に洗脳され、地上人生を間違った考えのもとに過ごした人も、死後は霊界でサタンなど存在しないことに初めて気がつくようになります。そして自分の地上人生が、いかに真実から懸け離れたものであったかを実感し、しばらくは後悔と無念の中で時を過ごすことになります。

サタンを利用して“低級霊”がからかう

キリスト教徒の中にも、心霊能力のある人間がいます。そして「自分は実際にサタンを見たことがある。遭遇したことがある」と主張する人がいます。しかし結論を言えば、そうした人間が見たというサタンは、実在するサタンではありません。その多くが低級霊のつくり出した想念霊（＊念によってつくり出された霊）であったり、低級霊の変化（化身霊）であったりします。

間違った教義（サタン魔王説）によって洗脳された地上人、特に霊能者は、低級霊にとっては実に都合のいいカモなのです。そうした地上人を低級霊は、どうにでも操ることができます。霊視能力のある者に、わざとつくり出したニセの映像を見せつけ、さもサタンが実在するかのように信じ込ませることもできます。また霊聴能力のある者の耳元に“自分はサタンだ”とささやきかければ、恐怖を与え怯えさせることもできます。こうしたことを繰り返して騒ぎを引き起こし、サタンの存在が事実であるかのような風潮をつくり出すのです。

低級霊によるからかいは、宗教教団全体を相手にしたときには、さらに効果的になります。霊界から教祖や幹部の自尊心・プライドを操ることで、教団全体を自由自在に混乱させ、翻弄することができるようになります。こうして間違った教義（サタン魔王説）は、教団全体を狂気の中に巻き込むことになるのです。純粋な人間がいったんそこにはまり込んでしまうと、なかなか抜け出せなくなります。恐怖に駆られた人間を間違った教義で縛りつけておくことは、低級霊にとっても宗教教団にとっても、いとも簡単なことなのです。

12 ‖ 天使に関する諸説と天使ブームの間違い

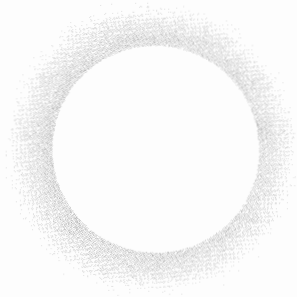
天使については、その内容の多くが地球人には秘密にされています。そのため天使には常に謎が付きまとい、天使に関するさまざまな説（＊その中にはデタラメで怪しいものが多い）を生み出すことになります。この章の最後に、これまでに存在した天使に関する諸説の中から、いくつか見ていくことにします。

スウェーデンボルグの天使論

中世のキリスト教から抜け出て、現在のスピリチュアリズムに最も近い立場に立っていた人物がエマヌエル・スウェーデンボルグでした。彼は幽体離脱の状態でたびたび霊界を探訪し、その体験を記録として残しました。それは地球人類にとって、初めての本格的な霊界の記述でした。彼はまさにスピリチュアリズムの先駆者であり、多くの霊的知識を地上世界にもたらしました。

スウェーデンボルグは、独特の天使論を展開しています。従来のキリスト教の天使論を離れ、自らの霊界見聞に基づく天使論を主張したのです。スウェーデンボルグの天使論のポイントは、「天使はもとは人間であり、姿も人間のようであって、人間と同じように家に住み、食事をし、結婚もし、仕事に従事している」というものです。彼は天界に住む人々を天使と呼び、その天使たちは、かつて地上で生まれた人間であると述べています。彼の天使論は、「天使イコール人間（高級霊）説」ということになります。

結論を言えば、スウェーデンボルグの天使論は正しくありません。霊界にいる人間の霊を“天使”と呼んだまでのことであって、見方によっては「人間の霊」の存在だけを認め「本当の天使」の存在を否定しているとも言えます。彼ほどの霊覚者であっても、シルバーコードで肉体とつながれ、肉体的・物質的影響を完全に排除できない中での霊界探訪には、どうしても多くの制約が付きまといます。肉体と完全に関係が断ち切れた霊界人のようには、明瞭な霊視認識ができないのです。霊視能力も行動範囲も限定され、そのために天使の状態を正確に認識できなかったのかもしれません。それが人間の霊（高級霊）と天使を混同させることになってしまったと思われます。



アラン・カルデックの天使論

スピリチュアリズム運動の初期の代表者アラン・カルデックも、スウェーデンボルグと同じような天使論を述べています。彼は著書『天国と地獄』の中で、天使とは進化した人間の霊のこと、すなわち高級霊のことであるといった個人的見解を述べています。これにはスウェーデンボルグの影響があるのかもしれません。

カルデックは霊界からの通信に基づいて、スピリティズム（ラテン系スピリチュアリズム）を確立しました。カルデックの天使論は、スウェーデンボルグと同様に天使の存在そのものを否定する見解と言えます。カルデックが編集した『霊の書』は“世界三大霊訓”の一つに数えられますが、この本の中には「天使イコール高級霊説」はありません。それどころかそこには、人霊とは別の天使の存在について言及している箇所が見られます。

したがってカルデックの説いた「天使イコール高級霊説」は、霊界から示された教えではなく、カルデック個人の考えであることが分かります。カルデックの間違った個人的な見解がスピリティズムを通じて広まったとするなら、実に残念なことです。カルデックはスピリチュアリズム運動の勃興時に、すでに再生の事実を主張し、スピリチュアリズムに大きな貢献をしましたが、その一方でこうした間違った天使論を述べたことは、ある意味で汚点を残したことになります。

『霊訓』の中での天使論

『霊の書』の出版後、しばらくしてステイントン・モーゼスによる『霊訓』（＊英国系スピリチュアリズムのバイブルで“世界三大霊訓”の一つ）が出版されています。そこには高級霊と天使が別の存在であることが明記されています。カルデック以降、天使に対する認識が進歩したことが窺（うかが）えます。

一方『霊訓』の中には、インペレーター霊が高級霊を“天使”と表現している箇所があります。高級霊を天使と呼ぶことは、他の霊界通信においてもしばしば見られます。当時の人々が十分な霊的知識のないところで霊界や霊界の住人について質問をしてきたのに合わせ、霊界側が高級霊を天使と呼んでいるのです。通信内容の全体から“天使”という用語が「人間の霊」を意味していることが理解されます。霊界通信を読む際には、この点について注意しなければなりません。“天使”という用語が出てきた場合、高級霊を指しているのか、それとも本当の天使を指しているのか、しっかりと判別して読み進める必要があります。

浅野和三郎の「竜神イコール天使説」

日本スピリチュアリズムの祖、浅野和三郎の「竜神説」はよく知られています。浅野は、竜神が人類の霊的祖先であると言います。そして天使・如来・菩薩・神仙を、竜神と同一の存在であるとしています。すなわち彼は、竜神と天使を同じものと考えていたのです。竜神（天使）は、その発達の程度に応じて幽界・霊界・神界の各層に実在し、その数は増えつつあると言います。

彼はまた、「地球に人類が登場する以前には、竜神がこの世界の代表者であったが、ある時期に竜神は分霊を出して人間を創造した」と言います。「地上の人間は、あくまでも竜神の統制下にあり、常に絶対的な力による支配を受けている。そして個人には個人の守護神（竜神）がおり、民族には民族の守護神（竜神）がおり、太陽系には太陽の守護神（竜神）がおり、この“太陽神”こそが、人類にとっての宇宙神である」と説いています。以上が浅野の「竜神イコール天使説」の骨子です。

竜神が本当に天使であるとするなら、浅野の言う天使（竜神）についての説明は、多くの点で正統的なスピリチュアリズムの見解と一致します。しかし同時に相違点も見られます。その一つは竜神（天使）が人類を創造したという点、もう一つは竜神（太陽神）を宇宙神と同一視している点です。

言うまでもなく人間を創造したのは「神（大霊）」であって、天使ではありません。人類の創造に天使が深く関わってきたことは事実ですが、天使が人間を創造したというのは間違いです。天使も人間も、神（大霊）の分霊を付与されることによって、永遠の霊的存在として誕生するようになったのです。天使と人間は同じ「神の子供」であって、天使は人間の創造者ではありません。竜神（天使）を宇宙神と同一視している点も間違っています。高級天使が、神の代理者・神の王国の役人として太陽系全体を統括支配していることは事実ですが、その高級天使が大霊であるとは言えません。

こうした点において、浅野の「竜神イコール天使説」は訂正されなければなりません。

天使イコール宇宙人説

天使に関わるこっけいな説の代表が、「天使イコール宇宙人説」です。これは従来天使と言われてきた存在が、実は宇宙からの来訪者・宇宙人であったというものです。そしてこの説は“ＵＦＯ伝説”と重なって、「天使（宇宙人）がＵＦＯに乗って地球にやってきた」という説に発展（？）しています。

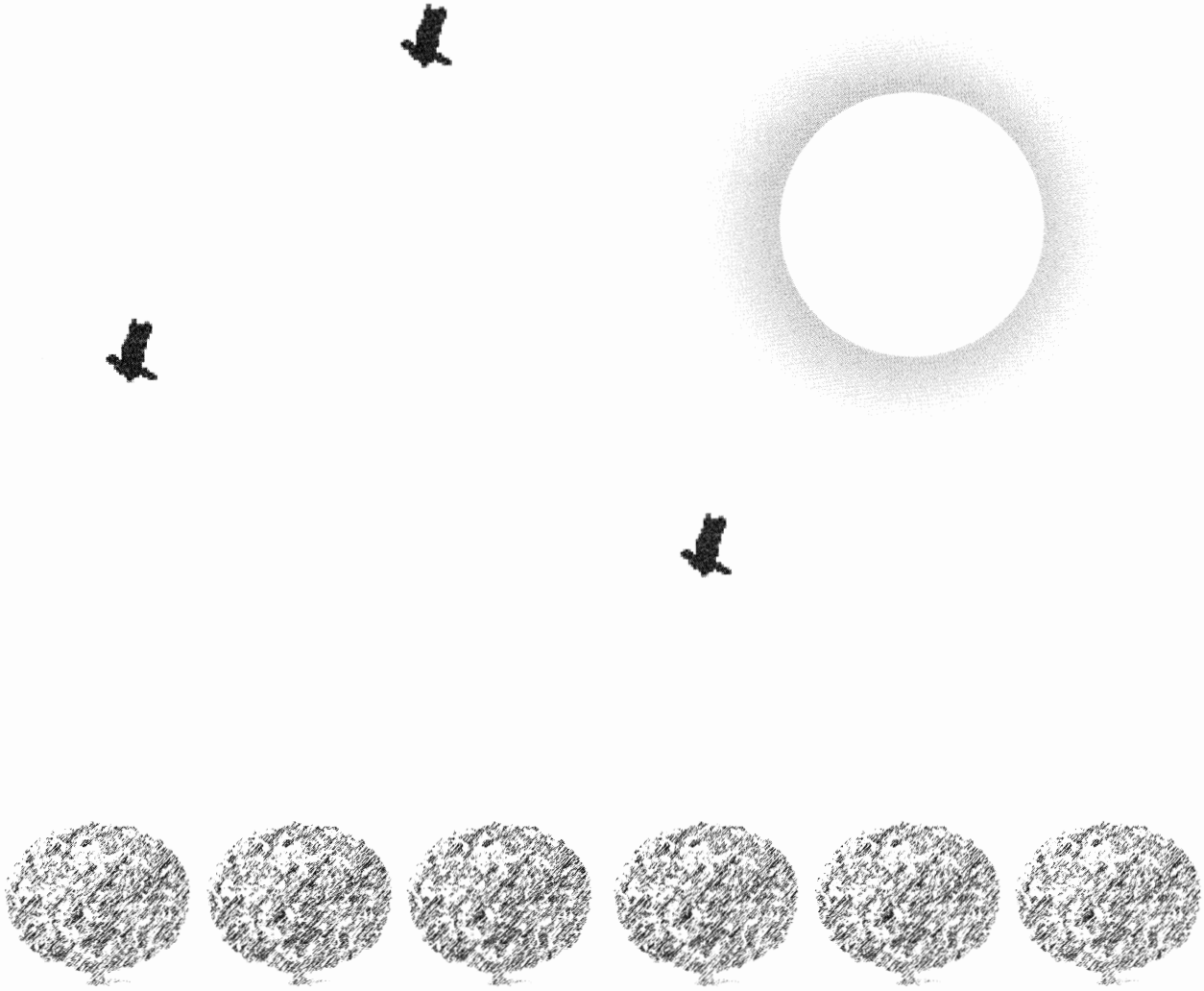
地球上には宇宙人と接触したという人々（コンタクティー）がいますが、その話の多くは催眠術を受けている間に思い出したとされるものであり、催眠の誘導によってつくり出された“フィクション”の可能性が濃厚です。あるいは“低級霊”が地上人をからかうために引き起こした霊的な演出であることも考えられます。もし未知なる存在との遭遇が事実であるとするなら、それは宇宙人ではなく、霊界人か本物の天使であったと考えるべきです。

天使からのチャネリング？

海外のニューエイジや日本の新新宗教、あるいは心霊世界に関心のある人々の間では、しばしば天使からの通信（チャネリング）が話題となります。その天使ですが、何と言っても“ミカエル大天使”が圧倒的に多いのが特徴です。キリスト教の中でも、ミカエル大天使の存在が重要視されてきましたが、ここでも同じようにミカエル天使がひんぱんに登場するのです。チャネリング（霊界通信）を通じて届けられたとされるミカエル天使からのメッセージは膨大な量に上ります。

しかし天使からのメッセージと言われるものの大半が、実際には低級霊からの通信であったり、チャネラー（霊能者）の単なる思い込みや作り話であったりします。すでに説明しましたが、そもそも高級霊（人間の霊）を差しおいて、天使が優先的に人類にメッセージを送るというようなことはありません。なぜなら地球人類にとって必要なメッセージは、まず高級霊を通じて届けられるようになっているからです。高級霊は、同じ地球出身の先輩霊としての責務があるために、地球人類を助け導くのです。ここに地球圏全体としての「自己責任の摂理」があります。

天使が霊界において高級霊にメッセージを与えることは、たびたびあります。しかし天使が地上人に直接メッセージを伝えるようなことは、ほとんどないと言っても過言ではありません。したがって天使からのメッセージとされるものや、天使とチャネリングすると言うようなチャネラー（霊能者）に対しては、その真偽を疑ってかかるべきです。



天使ブームの問題点

天使からのチャネリングと同様に気をつけなければならないのが、天使に対する低俗な好奇心から引き起こされる“天使ブーム”です。もし地上人が天使について正しい霊的知識を持っているなら、安易に天使に好奇心を抱いたり、過大な関心を寄せるようなことはないはずです。軽率に天使の名前を持ち出すようなことはないはずです。

中世ではキリスト教の間違った教義によって天使ブームが起こりましたが、それと同じようなことが、その後も繰り返し発生しました。現在でも日本の新新宗教や精神世界、そして欧米のニューエイジの中では、軽々しい天使ブームが巻き起こっています。ミカエル天使の生まれ変わりであると称する霊能者や、ミカエル天使が守護霊・指導霊であると主張する教祖やチャネラーたちが、次々と現れています。そして人々の低俗な好奇心と関心につけ込んで、狂信じみた天使ブームをつくり上げています。

言うまでもないことですが、ミカエル天使が人間に生まれ変わるというような話は事実ではありません。世界中に、ミカエル天使の生まれ変わりであると言う人間や、ミカエル天使が守護神・指導霊であると主張する教団が多く存在しますが、そうしたことはあり得ないのです。そもそも“ミカエル”という名前の天使は、霊界には実在しません。ミカエルなどの天使の名前を用いる霊能者や教団は、何の根拠もない詐欺（さぎ）に等しいことをしているのです。

稀に霊界人が、地上人の未熟さに合わせて好意的に配慮し“ミカエル天使”などといった名前の使用を黙認することがありますが、その場合も決して本当の天使ではないことを知っておくべきなのです。

また天使ブームの中で、天使からのメッセージを受け取ったとか、天使の守護によって危機から救われたというような体験がしばしば語られますが、それは天使ではなく人間の霊、特に守護霊の働きによるものです。臨死体験者が天使と会ったというような話もよく聞きますが、それも天使ではなく、すべて人間の霊なのです。

地上人にとって真っ先に意識すべき対象は「神と守護霊」であって、天使ではありません。守護霊を無視し、天使だけに意識を向けるという点で、天使ブームは大きな間違いを犯しています。現在の“天使ブーム”は、占いブームや前世さがしブームと共通する、実に馬鹿げた風潮と言えます。

スピリチュアリズムによって初めて明らかにされた“真実のイエス像”

スピリチュアリズムが教えるイエスの真相――1

イエスほど地球人類に大きな影響を与えた人物はいません。イエスはキリスト教の創始者ですが、スピリチュアリズムはキリスト教によってつくり上げられたイエス像を事実ではないと主張します。【2】で述べますが、イエスはスピリチュアリズムの主導者として、私たちと密接な関わりを持っています。ここではスピリチュアリズムによって初めて明らかにされた真実のイエスの姿を見ていきます。内容は次のようになっています。

今回の44号では【1】～【3】までを取り上げ、残りは次回に掲載いたします。

【1】霊的事実から大きく懸け離れたキリスト教のイエス像

1 ‖ イエスに関する記録の多くが事実ではない

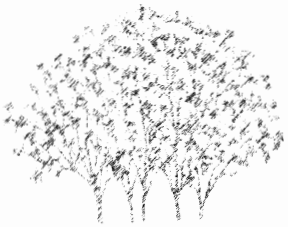
2 ‖ 福音書から真実のイエスを知ることはできない

3 ‖ イエスの死後につくられていったキリスト教

4 ‖ イエスをめぐるスピリチュアリズムとキリスト教の対立

【2】スピリチュアリズムによって初めて明らかにされた真実のイエスの姿

【3】イエスについての真実〈1〉……イエスは神ではなく、私たちと同じ人間である



【4】イエスについての真実〈2〉……イエスは人類史上、最高の霊性の持ち主である

1 ‖ イエスは人類史上、最高レベルの霊性の持ち主

2 ‖ イエスの受肉に関する重大な霊的背景

3 ‖ イエスの地上時代の霊的背後関係と、肉体の非凡さ

【5】イエスについての真実〈3〉

……イエスはスピリチュアリズムの中心者で、地球人類救済活動の総責任者である

1 ‖ イエスの使命

2 ‖ イエスの十字架処刑と、イエスの死後の進化

3 ‖ イエスはスピリチュアリズムの主宰者

——イエスは霊界からスピリチュアリズム運動を指導

【6】イエスについての真実〈4〉……イエスは人類史上、最高の霊能者である

1 ‖ バイブルの中のイエスの奇跡

2 ‖ イエスは人類史上、最高の霊能者

3 ‖ イエスの奇跡は、すべて神の摂理に基づいての演出

4 ‖ イエスによる奇跡演出の目的

【7】イエスについての真実〈5〉

……イエスの生前の教えは、スピリチュアリズムと同じ基本的な霊的真理

1 ‖ イエスの教えは、キリスト教の教義とは全く別もの

2 ‖ イエスの説いたシンプルな教え

【8】イエスについての真実〈6〉

……イエスは全人類にとっての生き方の手本（イエスに対する私たちの姿勢）

【9】イエスについての真実〈7〉

……イエスに関するさまざまな謎と、仮説・憶測

1 ‖ イエスの地上人生における謎と仮説

2 ‖ イエスの再臨について

3 ‖ 後世の人々によってつくられた仮説や憶測

【1】霊的事実から大きく懸け離れたキリスト教のイエス像

1 ‖ イエスに関する記録の多くが事実ではない

神話的に描かれたイエス像

一般的にイエスについては、新約聖書を通して知ることができるものと思われています。しかしイエスに関する記録はたいへん乏しく、その乏しい記録にも多くの改竄がなされています。聖書（バイブル）には、実際はありもしなかった内容が書き加えられています。結論を言えば、聖書によって示された“イエス像”は、どこまでも神話的に描かれた人為的なものにすぎません。

現在では、よほど熱心なクリスチャンでないかぎり、バイブルに記されたイエスの言動をそのまま信じている人間はいません。イエスをあくまで信仰の対象として考えるクリスチャンにとっては、バイブルの中に記されたイエスの姿は真実そのものということになりますが、そうでない人間にとっては、バイブルの内容は作り話のようにしか考えられません。

科学の発展は、クリスチャン自身の信仰に少なからず影響を及ぼすようになっています。理性に反するバイブルの内容に、多くの信者が葛藤しながら信仰生活を送ることになっています。聖書の言葉を頭から受け入れて信じるという生き方は、クリスチャンにとっても、かなり難しいことになりつつあります。

バイブル原典の作成の実態

聖書に見られるイエスの言葉には、生前のイエスが語ったものではない内容も含まれています。初期のキリスト教徒は、イエスが遠からず再臨するものと信じていたため、その地上生活について細かく記録することをしませんでした。しかしいつまで経っても再臨しないので、仕方なく諦めて記憶をたどりながら、イエスの言ったことを記録にとどめることになりました。「イエス曰く……」とバイブルにあっても、実際にそう言ったかどうかは、書いた本人にも確かではありません。

バイブルのもとになった原典の編集者は、イエスから直接教えを受けた者との接触はなく、当時の風聞をもとに間接的に資料を得たにすぎません。これではあたかも何世紀も後になってから歴史を編纂するのと同じことです。

現在のバイブルは、原典のコピーのコピー

バイブルは西暦90年に完成したとされていますが、バイブルのもとになった文書（原典）は、バチカン宮殿の奥に仕舞い込まれ、一度も外部に持ち出されたことはありません。現在、人々が目にするバイブルは、原典のコピーのコピーのそのまたコピーであり、そうした過程において原典にないものまでいろいろと書き加えられています。

新約聖書はイエスの死後、人間の手によって捏造された内容が付け加えられた人工的な書物なのです。

※福音書に記されたイエスの記録のすべてが、作り話であるということではありません。その中には部分的ではあっても、事実が存在します。シルバーバーチは、それについて次のように述べています――「福音書の中には真実の記述もあるにはあります。たとえばイエスがパレスチナで生活したのは本当です。低い階級の家に生まれた名もなき青年が聖霊の力ゆえに威厳をもって訓えを説いたことも事実です。病人を霊的に治癒させたことも事実です。心の邪な人間に取り憑いていた憑依霊を追い出した話も本当です。」　（シルバーバーチ 3・102）

2 ‖ 福音書から真実のイエスを知ることはできない

新約聖書の冒頭にある４つの福音書（マタイの福音書・マルコの福音書・ルカの福音書・ヨハネの福音書）は、キリスト教におけるイエス伝ですが、そこに記されているイエスについての内容には神話的要素が多分に含まれ、とうてい真実のイエス像とは言えません。それはキリスト教にとって都合のいいようにつくり上げられた架空のイエス像であり、歴史上に実在したイエスの姿からは大きく隔たっています。

『福音書』形成の過程

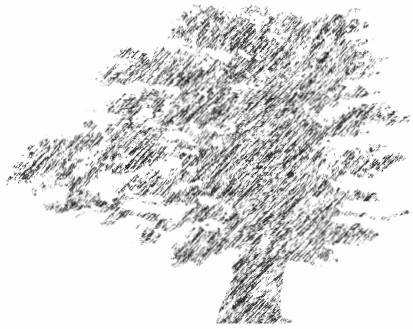
イエスの死後、弟子たちを中心として、イエスの教えや行いが語り伝えられていきました。こうした口伝（くでん）がやがて「原マルコ資料」にまとめられ、これをもとにして今日の『マルコによる福音書』が成立したと考えられています。マルコによる福音書の成立は、紀元65～68年頃と推定されています。『マタイによる福音書』は、原マルコ資料にＱ資料・Ｍ資料（注１）といった別の資料を参照しながら、紀元85年頃にまとめられたものと考えられています。『ルカによる福音書』は、原マルコ資料・Ｑ資料以外に、ルカ独自の資料を加えてまとめられたものと考えられ、成立は紀元80～90年頃と言われています。ルカはパウロの弟子で、医者であった人物と推測されています。この他に『ヨハネによる福音書』がありますが、これはすでに成立していたマルコ・マタイ・ルカの福音書を参照して、ヨハネという人物が（＊身元には諸説があります）彼独自の資料を付け加えてまとめたもので、成立は紀元100年頃と推定されています。

以上の４つの福音書が、一般的にはイエスの生涯と行動と思想を知るうえでの根本資料とされています。このうちマルコ・マタイ・ルカの３つの福音書には共通する部分が多いので、「共観福音書」と呼ばれています。

こうした経緯から、イエスの言行を記したとされる福音書そのものが非常に曖昧（あいまい）で、成立過程において人為的な要素が多く加えられていることが分かります。イエスの誕生というきわめて重要な記録についても、マタイ伝とルカ伝では全く内容が異なっています。あまりにも内容が違っているため、両者を合体させることは不可能です。この事実からも分かるように、福音書はとうてい信頼できる歴史的資料とは言えません。福音書を一字一句その通りに解釈しようとすることは、ほとんど意味のない無駄な作業なのです。

（注１）「Ｑ資料・Ｍ資料」について

マタイ・ルカの各福音書には、マルコの福音書にはない記述があります。その多くはイエスの語録に関わるもので、マルコの福音書の他に典拠となった資料があったことが想定されています。そうしたイエスの語録に関する資料がＱ資料です。またＱ資料以外にもさらに別の資料があるとされ、Ｍ資料やＬ資料と呼ばれています。これらの資料は、すべて現存していない謎の資料です。



近代になって揺らぎ始めた『福音書』への信頼性

近代以降、多くの歴史学者や聖書学者が、イエスの実像を明らかにしようとさまざまな研究に乗り出しました。当時の社会的・時代的背景や宗教的慣習、また周辺地域の宗教事情などを細かく分析して、福音書の記述内容の信憑性を検証してきました。その結果、福音書の内容の真実性に、次々と疑問が投げかけられるようになりました。

近代における聖書の実証研究の結論は――「真実のイエスの姿については、バイブルからは何も歴史的事実を知ることはできない」「イエスという人物はおそらく実在したであろうが、それ以外の確かなことはほとんど分からない」というものでした。当然のこととして、その結論は多くのキリスト教関係者にショックを与え落胆させることになりました。福音書への信頼性が崩れる中で、イエスの存在自体に対しても疑問が発せられるようになり、研究者の中には「イエスは実在しなかったのだ」と主張する者も現れました。

その一方で、近世以降、新たな古文書（こもんじょ）の発見や遺跡の発掘がなされ、福音書からは知ることのできなかったイエスについての真相の一端が、別の方面から少しずつ明らかにされるようになっていきました。発見された古文書は、福音書の内容を否定すると同時に、新たなイエスの姿を描き始めることになりました。イエスの実像については、今後の文献の発見や発掘を通じて、また歴史学・考古学上の発見を通じて、さらに明瞭にされていくことでしょう。

福音書のイエス像は人工の創作物

聖書は、その当時の宗教と社会と文化の産物です。バイブルには、イエスが生まれる以前より存在した書物からの引用が数多く見られます。バイブルの中には、他の文化圏の神話が多く含まれています。「キリスト教の“イエス伝”である福音書からは、史実としてのイエスの姿を明らかにすることはできない」――これが今日の聖書学者の一貫した見解となっています。イエスを知る唯一の手がかりと思われてきた福音書を通しては、真実のイエスの様子を知ることはできないということなのです。

福音書の中のイエスについての記述は事実ではなく、後世の人々のさまざまな思惑によってつくり上げられた創作と言ってもいいようなものです。それは福音書のイエス伝の中に、異教の神話からの引用が多く見られることによっても明らかにされます。例えばイエスが処女マリアから生まれたというストーリーについては、同様の話が、イランの神話の中に見出されます。その神話の中に登場する神は、未来の救世主とされ、終末時に現れて永遠の生命を与えるとされてきました。この神話がキリスト教に取り入れられて、イエスの架空の人物伝を形成することになったのです。

さらにその神の分身である別神は、誕生日が12月25日とされています。世界各地の神話の中では、しばしば12月25日が神の誕生日とされてきました。それは“太陽信仰”に基づくもので、1年のうちで最も太陽の力が弱くなる（1日の日照時間が最も短くなる）12月25日の冬至の時期に、神々が新たに生まれ変わり再生すると考えられてきたからです。日本の神道も典型的な太陽信仰（＊「天照大神」という名称が端的にそれを示しています）で、やはり冬至の時期に神が生まれ変わり蘇るとされ、それが神道の最大の行事となってきました。

イエスの誕生日が12月25日とされた点に、それ以前から周辺地域で行われてきた“太陽信仰”がキリスト教の中に取り込まれたことが示されています。言うまでもないことですが、イエスが12月25日に生まれたとする根拠は、どこにもありません。

一方、古代エジプトの宗教では、オシリスとイシスとホルスという三位（さんみ）の神を崇拝していました。そこにおける女神イシスとその子ホルスの関係が、キリスト教の中に取り入れられて、マリアとイエスに関する神話をつくり出しました。当時のエジプトの宗教では、イシス神は処女でありながら子供をもうけています。その子供であるホルス神は、蘇りの神であり、しかもホルス神は馬小屋で生まれたことになっています。オシリスが最高神、イシスが母なる神、そしてホルスが人間の罪の犠牲者としての子なる神とされています。この三位の神の構図は、まさにバイブルの中に記されたストーリーと瓜ふたつです。

このように他の宗教の神話を材料として“イエス像”がつくられ、イエスの神格化が進められました。こうした事実を見ると、バイブルは人工的な神話以外の何ものでもないことが、よく分かります。バイブル（聖書）を通して、真実のイエスの姿を知ることはできません。どれほど聖書を研究しても、そこから真実のイエス像が浮かび上がってくることはありません。

3 ‖ イエスの死後につくられていったキリスト教

パウロの誤解からつくられた“根幹教義”

一方、キリスト教の信仰の中心的概念（教義）は、イエスの言葉だけでなく、パウロの個人的解釈によって形成されたところが大です。その意味でキリスト教は、実際には“パウロ教”と言うべきものです。

そのパウロの解釈には、霊的事実に照らしたとき多くの点で本質的な間違いが見られます。「イエスを信じることによって救いに与（あずか）ることができる（信仰による義認）」「イエス・キリストによる贖罪（しょくざい）によって人類は罪が許され救われる（贖罪による救済）」など、霊的事実から大きく逸脱したパウロの個人的見解が、やがてキリスト教の根幹教義となっていくことになります。

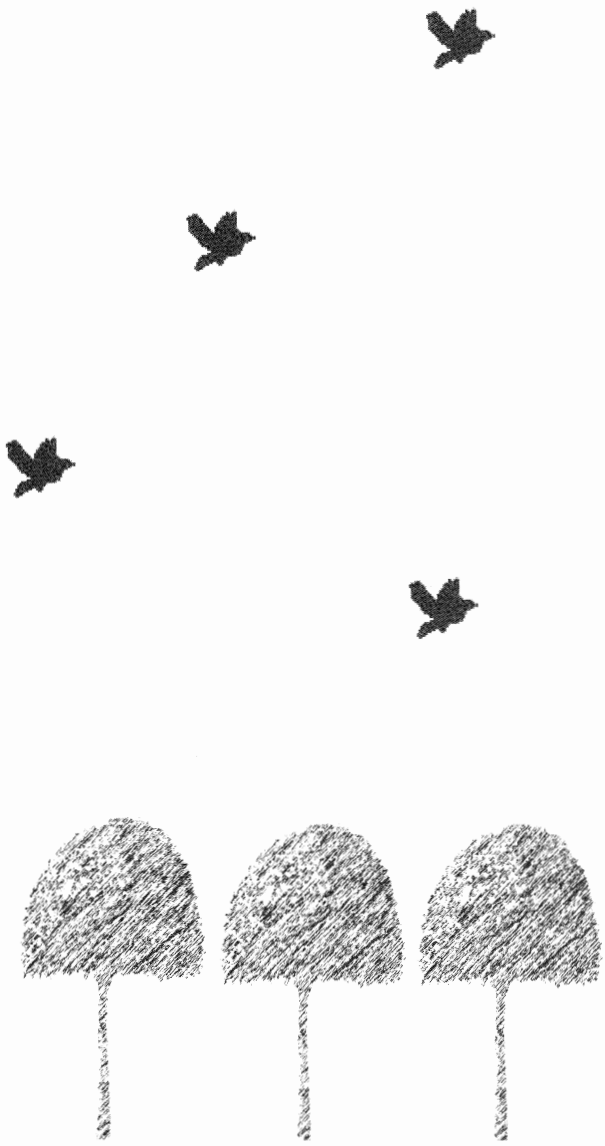
“ニケーア公会議”での陰謀

イエスについての決定的に間違った考え方が、325年のニケーア公会議によって定着することになりました。イエスを神とする間違ったイエス観が、このニケーア公会議によって公認され、キリスト教の正統教義となってしまいました。

ローマ皇帝コンスタンティヌスが、小アジアのニケーアに、帝国全土の司教を招集して宗教会議を開きました。この会議で、「（イエスは神によって造られたものであり、そうである以上）イエスは神ではない」とするアリウス派と、「（イエスは神によって造られたものではなく創造する側にあり、それゆえ）イエスは神である」とする皇帝派が激しく対立しました。圧倒的多数のアリウス派によっていったんは「イエスは神ではない」との見解が採択されましたが、怒ったコンスタンティヌス帝は武力でアリウス派を国外追放し、残った300名の皇帝派の者たちによって「イエス、イコール神」というイエス観を満場一致で採択してしまいました。ここにイエスを神とする見解がキリスト教の公式教義となり、アリウス派の見解は異端とされることになりました。こう

して霊的事実から懸け離れた「イエスは神である」との教義に立ったキリスト教が誕生することになったのです。そのキリスト教はローマの国教となり、イエスを神とする誤った考えがキリスト教の正統教義として、21世紀の現代に至るまで延々と続くことになりました。

次で述べますが、イエスが神であるはずがありません。そうした事実は霊界のどこにも存在しません。しかし人間の「霊的無知」と勝手な都合によってつくり上げられた間違ったイエス像は、その後、長期にわたって人々を洗脳し続けました。そして現在も多くのクリスチャンが、真実とは異なるイエスを信仰の対象として崇拝しているのです。



4 ‖ イエスをめぐるスピリチュアリズムとキリスト教の対立

キリスト教は世界三大宗教の一つとして、歴史上、人類に最も大きな影響を及ぼしてきました。キリスト教はイエスを「罪のない唯一の神の子供」として、また人類に救いをもたらす「救世主（メシア）」として考えてきました。イエスをメシアと信じることによって罪が許され、救われると教えてきたのです。またキリスト教では「三位（さんみ）一体論」（注２）に基づいて、イエスを“神”として説いてきました。

スピリチュアリズムは、このような霊的事実に反するキリスト教の“根幹教義”を全面的に否定し、真正面からキリスト教と対立してきました。キリスト教は、そうしたスピリチュアリズムを“サタンの手先”と見なし、徹底して非難・迫害をしてきました。

（注２）

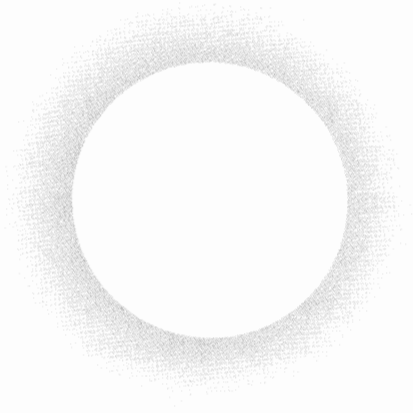
キリスト教神学では、神には「父なる神」「子なる神」「聖霊なる神」という三位があるとします。これら３つの神は独立して別々にあるのではなく、３者が一体となって１つの神を形成しているとします。神は創造以前から完全なものであり、父と子と聖霊も創造以前から一体のものであったとします。これがキリスト教の正統教義として、ニケーア公会議で決定された「三位一体論」です。

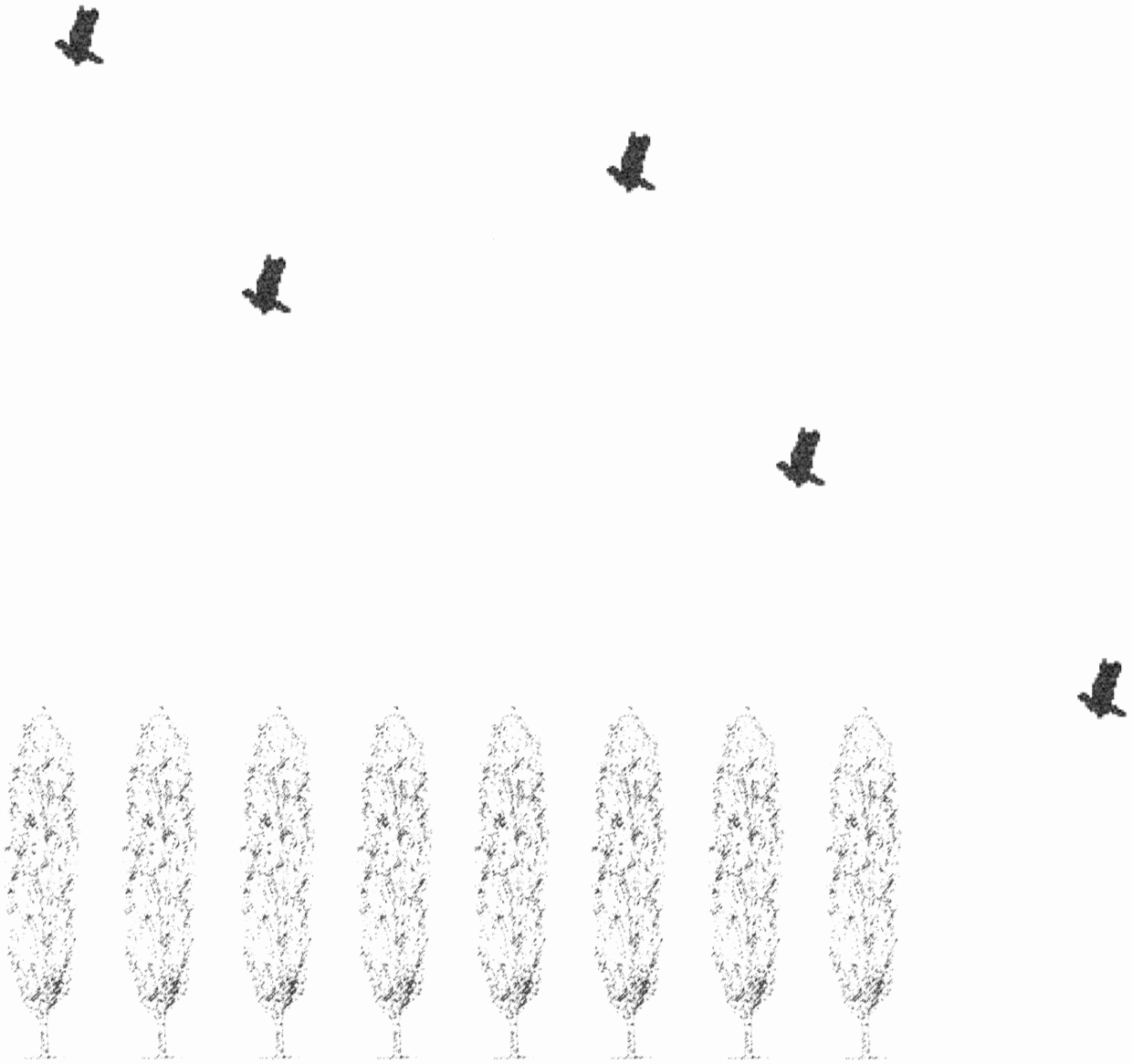
この三位一体論によるなら、イエスは被造物ではなく神であり、創造主の側にある絶対者ということになります。イエスは創造主と全く同質の創造主であり、永遠の神ということになります。キリスト教徒（カトリック教徒）が言う“イエス・キリスト”とは、こうした神であるイエスを意味しています。この「三位一体論」を純粋に論じて神学的基礎づけをしたのが、ラテン教父の代表であったアウグスティヌスでした。

イエスこそ、スピリチュアリズムの主導者

スピリチュアリズムは、キリスト教の思い描いてきたイエス像を根本から否定しますが、イエスの存在そのものを否定しているわけではありません。それどころかイエスこそが、霊界を挙げてのスピリチュアリズム運動の主導者であり、一番の中心者・最高責任者であるとします。“スピリチュアリズム”は、まさにイエスによって始められた大プロジェクトなのです。

この意味においてイエスの存在は、キリスト教徒と同様に、スピリチュアリストにとってもきわめて重大な意味を持っています。スピリチュアリズムの精神は、イエスの意志そのものなのです。





【2】スピリチュアリズムによって初めて明らかにされた真実のイエスの姿

スピリチュアリズムによって知ることが可能になった“イエスの実像”

2千年前、イエスに付き従って生活をともにしてきた一部の弟子たちは、キリスト教で説かれてきたのとは全く異なるイエスの姿に触れていたはずです。ところが残念なことに弟子たちは、目の前のイエスの霊的価値と霊的背景を正しく理解することができませんでした。また弟子たちは、イエスの言動を詳細な記録として残すことをしませんでした。これが、その後のキリスト教の間違ったイエス像、人為的に捏造されたイエス像を形成する遠因となってしまいました。

「イエスとは、いったいどのような人物であったのか？」「現在イエスは、どこで何をしているのか？」――こうした質問に対する答えは、どれほど聖書を読んでも得られません。どれほど新たな古文書が発見されても、その全貌が明らかにされることはありません。では私たちは、イエスの実際の姿や様子を知ることは、一切できないのでしょうか。

実はスピリチュアリズムの到来によって、地上人類は“真実のイエスの姿”を知ることができるようになったのです。霊界を挙げてのスピリチュアリズム運動の中で、高級霊界から地上世界に向けて降ろされた霊界通信が、当時のイエスの様子と、霊界における現在のイエスの実像を伝えているのです。

イエスは2千年前に地上世界を去り、その後、今日に至るまでずっと霊界の住人として存在してきました。霊界でイエスと直接交わることのできる高級霊によって、イエスのありのままの様子が地上に伝えられるようになったのです。言うまでもなくそれは、これまで地上人類が全く知ることのなかった、まさに奥義（おうぎ）とも言うべき内容であり、スピリチュアリズムによって初めて実現した快挙です。

イエスと直接触れ合うシルバーバーチ霊

シルバーバーチは、自分がイエスと近しい関係にあることをしばしば述べています。シルバーバーチは、キリスト教の牧師との論争の際――「私はあなたが想像なさる以上に、イエスと親密な関係にあります。私は主イエスの目に涙を見たことがあります」（シルバーバーチは語る・366）と述べています。また「今この時点でなさっているイエスの仕事を知っておりますし、ご自身は神として崇められることを望んでおられないことも知っております」（シルバーバーチは語る・364）とも述べています。さらに「私は何度となくお会いしております。イエスは“父”の右に座っておられるのではありません。（中略）イエスは進化せる高級霊の一人です。地上人類の手の届かないほど誇張され神格化された縁遠い存在ではありません。すぐに手の届くところで、あなた方がスピリチュアリズムと呼んでおられるこの真理普及の指揮をなさっておられるのです。（中略）私たちが実際にお会いし、そして激励の言葉をいただいているのが、実在の高級霊、かつて地上で“ナザレ人イエス”と呼ばれていた方なのです」（霊性進化の道しるべ・65、66）と言っています。

この後【5】でも述べますが、シルバーバーチは、年に2回、霊界の最上層で行われるイエス主宰の高級霊の大審議会に参加が許されており、そこでイエスに会って直接指導や指示を受けるという立場に立っています。シルバーバーチは現在も同じように、定期的にイエスに会っているのです。

高級霊によって明らかにされたイエスの実像——“6つのポイント”

シルバーバーチなどの高級霊によって今、イエスの実際の様子とイエスの霊的立場が伝えられるようになりました。イエスに対する「霊的事実」は、これまで地球人類には奥義として隠されていたものです。スピリチュアリズムが地上で展開するようになって、初めて知ることが可能となったのです。

シルバーバーチによって人類史上、初めて明らかにされたイエスの実像は、次の6つのポイントにまとめられます。

①イエスは神ではなく、私たちと同じ人間である。

②イエスは地球人類史上、最高の霊性レベル（霊的成長度）に至った人間である。そして今現在も地球出身の霊たちの中で、最高の霊格を持った高級霊として霊界の最上層に住んでいる。

③イエスはスピリチュアリズムを主宰し、これを通して「全人類救済活動」を推し進めている。イエスはスピリチュアリズムの指揮官であり総責任者である。

④地上時代のイエスは卓越した霊能者であった。これによって数々の目覚しい心霊現象を現出させた。

⑤イエスが地上時代に説いた教えは、愛なる神の存在と、神の愛に倣(なら)ってお互いが利他愛を実践することの重要性を強調するものであった。その教えは実にシンプルなものであり、キリスト教の教義とは似ても似つかぬものであった。

⑥イエスに対して私たちがとるべき姿勢は、イエスを信仰の対象として崇拝することではなく、神の摂理に忠実な生き方をした“人間の手本”として見習うことである。

イエスは、キリスト教で言われてきたような神でもなければ、罪なき唯一の神の子供でもありません。イエスは、私たちと同じ人間であり、死後は霊界で一人の高級霊として生き続けています。ただその霊性レベル（霊的成長度）は、他の霊と比べたときに飛び抜けて優れており、地球人類史上、イエスに匹敵する高い霊性の持ち主は存在しません。イエスは2千年前に、「地球人類の魂を救済する」という使命を持って地上に降臨しました。死後は霊界において、地上で始めた救済活動を継続し、それが現在“スピリチュアリズム”という霊界を挙げてのプロジェクトとして展開することになっています。イエスは今この時も、霊界においてスピリチュアリズムの陣頭指揮を執り、地上世界に働きかけています。

イエスが地上時代に見せた目覚しい奇跡的な心霊現象は、彼が卓越した霊能者であったことを示しています。イエスを“霊能者”という観点から見るならば、イエスは人類史上、最高レベルの霊能力を発揮した人物ということになります。

こうしたイエスに対して、私たちがとるべき態度は、クリスチャンがこれまでしてきたような信仰の対象として崇拝することではありません。同じ人間としての最高の生き方の見本と考えるべきなのです。そしてイエスを見習って、より良き地上人生を歩むように努力するということなのです。

以下では、上述した①～⑥の内容を詳しく見ていきます。

【3】イエスについての真実〈1〉
……イエスは神ではなく、私たちと同じ人間である

イエスは私たちと同じ人間

キリスト教では、イエスを私たちと同じ人間ではなく、罪のない唯一の神の子供であり、同時に神であるとしていますが、それは「霊的事実」に照らしたとき、すべて間違いです。スピリチュアリズムは霊的事実に基づいて、イエスが私たちと同じ人間であることを明らかにしています。

イエスの出生も死も、私たち人間と同じです。そこには何の奇跡も特殊な状況もありませんでした。処女から奇跡的にイエスが誕生したのではありません。イエスに肉体を提供した父と母がいて、彼らによってイエスは、地上で生活するための肉体を得たのです。そして十字架にかけられて肉体を失った後は、霊として霊界で永遠の人生を過ごすことになりました。イエスは今、霊界にいる他の億万の霊たちとともに生活しています。イエスは霊界で一個の霊として現在まで存在してきましたし、今後も同様に霊界で生きていくことになります。

イエスの誕生や死にまつわる奇跡の記述は、後世の人々がイエスを神格化するために、他の多くの神話から材料を借用して意図的につくり出したものです。

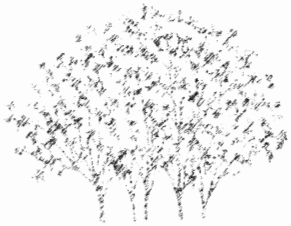
> イエスの誕生には何のミステリーもありません。その死にも何のミステリーもありません。他のすべての人間と少しも変わらない一人の人間であり、大自然の法則にしたがってこの物質界へやってきて、そして去って行きました。
>
> （最高の福音・263）

> イエスも大霊が定めた自然法則、すべての人間がこの地上界へ誕生するに際してお世話になる法則の働きで誕生しております。この地上界へ生まれ、生き、そして霊界へと旅立って行くに際しては、いかなる人間も大霊の自然法則の働きに与（あずか）るのです。
>
> （シルバーバーチは語る・159）

イエスが神ではないということは、イエス自身が述べた言葉からも明らかです。イエスは「天にます我らが父に祈れ」と言っています。「自分に祈れ」とは言っていません。父に祈れといったイエス自身が、天にます我らが父であるはずがありません。私に祈れとは言わずに、父に祈れと言ったのです。このことからイエスが神ではないことは明白です。

先にも述べましたが、イエスを神とするキリスト教の「三位一体論」は間違っています。

> イエスなる人物は大霊だったわけではありません。大霊がイエスとなって出てきたのではありません。もしも神学で説かれているように、イエスは大霊が物的身体をまとって出現したのだと信じたら、せっかくのイエスの存在価値はなくなり、無意味となります。
>
> （霊的新時代の到来・42）



神ご自身が人間的形体をまとって出現した――それが、第一だか第二だか第三だか知りませんが、とにかく“三位一体”のいずれかの“位”を占めているという神学上の説のことをおっしゃっているのであれば、それは完全無欠の神の化身なのでしょうから、完全無欠の人生を送るのは容易かもしれませんが、そんな人生には価値はないと申し上げているのです。ナザレ人イエスの使命の肝心なものが消滅してしまいます。　（霊的新時代の到来・43）

イエスだけが唯一の神の子供ではない

キリスト教では、イエスだけを罪のない唯一の神の子供であるとします。しかし神の分霊として、個別霊として誕生した人間は皆、「神の子供」です。イエス一人が神の子供ではなく、分霊を付与された人間は全員、イエスと等しい神の子供なのです。この点で、イエスだけを唯一の神の子供とするのは間違いです。

スピリチュアリズムでは、神の分霊を“ミニチュアの神”と表現することがありますが、それは人間が「神（大霊）」そのものという意味ではなく、神から分離・創造されて独立性を持った「個別霊」ということなのです。神の分霊であるため、人間に内在する霊（ミニチュアの神）は、大霊と同一の霊的要素を持っています。赤ちゃんの肉体が、母親の肉体と同じ要素を持っているのと同様の意味で、人間は神の一部と言っているのです。出生後の赤ちゃんと母親が別々の存在であるように、神から創造された人間は、神と同じ要素を持ちつつも別の存在、独立した存在なのです。

イエスは“神”ではありません。全生命を創造し人類に神性を付与した、宇宙の大霊そのものではありません。　（最高の福音・264）

イエスだけでなく人間のすべてに神の分霊が宿っております。ただ、その神性を多く発現している人と少ない人とがいるだけです。

（シルバーバーチは語る・337）

人間には“原罪”はない。原罪は「霊的無知」から人間が勝手につくり出した概念

キリスト教では、人類の始祖が神の掟(おきて)に背いて堕落したために“原罪”が発生し、それが子孫に遺伝して人類に罪が行きわたったと考えます。人類は皆“罪人”であるとし、人間はこの罪ゆえに肉体の死を迎えるようになったと教えています。そしてこの罪を持っていないのが「唯一の神の子供」であるイエスであり、そのイエスは十字架にかけられた後に復活したと説いています。

霊的事実に照らしてみれば明らかなように、原罪ならびに、すべての人間が罪人であるという事実は存在しません。また人間始祖を誘惑して罪人に陥れたとするサタン（堕天使）も存在しませんし、そうした原罪やサタンの存在を認める霊界人はいないのです。罪によって肉体の死がもたらされるようになったという考え方は、霊的事実に対する「無知」としか言いようがありません。

キリスト教が“原罪・罪”と言ってきたもの、あるいは他の宗教（仏教など）が“煩悩(ぼんのう)”言ってきたものは、肉体を持っているがゆえに簡単に「肉主霊従」に傾いてしまう地上人の内的傾向を指しているのです。地上の人間は肉体があるために、本能的思いに引きずられ、清らかな霊的意識を持ち続けることができません。努力しても、なかなか純粋な霊的意識を保つことができません。ここに高い霊的境地を求める求道者としての苦しみが発生します。そうした状況を“罪”とか“煩悩”として、悪なる対象と見なしてきたのです。

しかし肉体は、神が人間の「霊的成長」を願うところから与えたものです。肉体は、厳しい物質的環境の中で霊的成長を目指して生きていくための“道具”です。その意味で肉体から生じる苦しみは、神が与えた訓練として受け止めるべきものであり、罪や煩悩として非難し忌み嫌うようなものではありません。地上という物質世界での生活は、せいぜい100年にも満たないものです。死ねば物質の束縛から解放されて、霊界で自由にのびのびと生活することができるようになります。

こうした神の配慮を知らずに、人間サイドの判断で“罪”だとか“煩悩”だとか言うことは「霊的無知」以外の何ものでもありません。イエスをそうした論法の中で語ること自体が、全く意味のないことなのです。原罪も罪も実際には存在しない以上、キリスト教の説く「イエスは罪なき唯一の神の子」「罪なきゆえに神と人間の仲介者として罪人を許し救うことができる」といった教えは、すべて間違っています。

イエスの人間性を示すエピソード

バイブルの中には、イエスの人間性を示す記述が見られます。その一つが、イエスが両替商人を教会堂から追い出した話です。イエスは教会堂という神聖な場所を汚す人間に腹を立て、ムチを持って追い払いました。その怒りは霊的な動機としては正しいとしても、怒りはどこまでも怒りです。“怒る”ということは人間的な感情です。この事件は、イエスがごく普通の人間的感情を持っていたということを示しています。イエスが神ではなく、人間であることを表すエピソードと言えます。

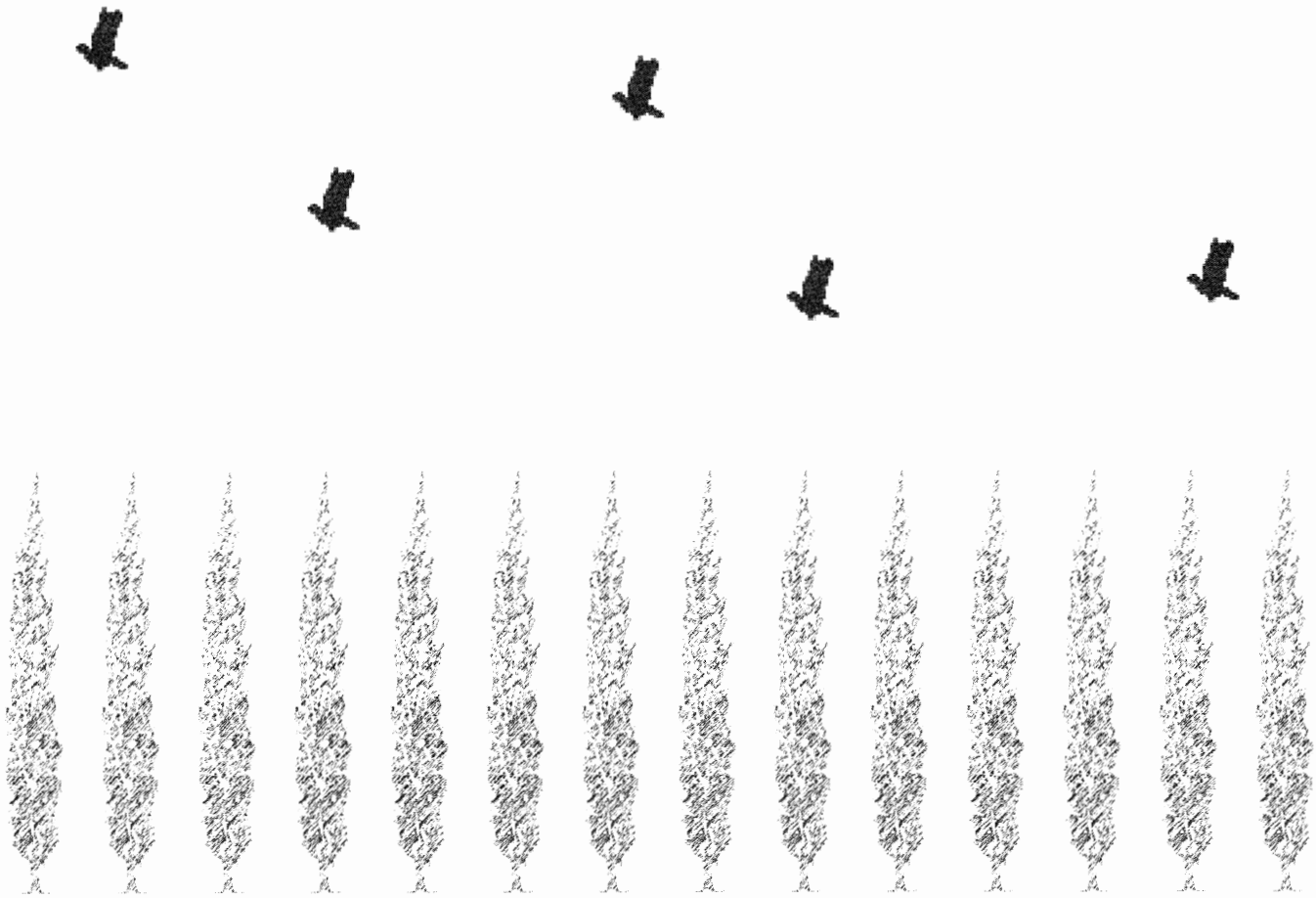
イエスの生前の生活は実に庶民的でした。イエスを取り巻く生活は、和気あいあいとした雰囲気に包まれ、イエスもそれを心から楽しんでいたものと思われます。バイブルには、そうしたイエスと人々との交わりについての記述がほとんど見られません。イエスを神格化しておくために、意図的にイエスの人間性を記さないようにしたものと思われます。

イエスを同じ人間として見る

シルバーバーチは、次のように言っています。

> 誰の手も届かない所に祭り上げたらイエスが喜ばれると思うのは大間違いです。イエスもやはり我々と同じ人の子だったと見る方が、よほど喜ばれるはずです。自分だけが超然とした位に留まることは、イエスは喜ばれません。人類と共に喜び、共に苦しむことを望まれます。　（シルバーバーチは語る・352）

> イエス・キリストを真実の視点で捉えなくてはいけません。すなわちイエスも一人間であり、霊の道具であり、神の僕（しもべ）であったということです。　（シルバーバーチ３・104〜105）



第７回 公開ヒーリングを終えて

日本スピリチュアル・ヒーラーグループからの報告

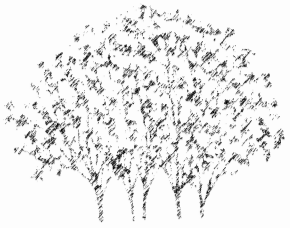
昨年の11月23日（日）、横浜市の“アートフォーラムあざみ野”で、日本スピリチュアル・ヒーラーグループの「第７回・公開ヒーリング」を開催いたしました。今回は、西洋医学の医師や治療師の方からも多くのお申し込みをいただき、医療に携わる人々の間で、スピリチュアル・ヒーリングへの関心が高まってきていることを感じました。

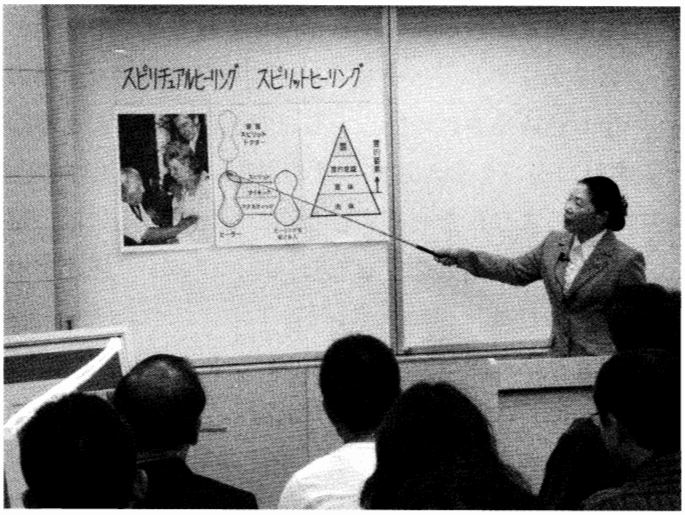
公開ヒーリングも回を重ねるごとに少しずつ進歩し、霊的な充実度も高まってまいりました。今回、多くの方々がヒーリングの進行にともなって身体が熱くなるなど、霊的エネルギーがふんだんに注がれていることを実感することができました。

スピリチュアル・ヒーリングは、霊界の綿密な準備のもとで行われます。公開ヒーリングへの申し込みをされた時点から、霊医と患者さんとの間にヒーラーを媒介とした霊的パイプ（霊的絆）がつくられます。その霊的パイプを用いて、霊医が治療エネルギーを送り、治療が行われるようになります。今回の参加者の中には、電話をかけてこられた時点から病気がよくなったという方や、参加前日にはすっかり痛みが消えてしまったという方が何人かいらっしゃいました。

このように公開ヒーリングの前に、すでに霊医による１回目のヒーリングが開始されます。そして２回目のヒーリングが、公開ヒーリングの会場で行われることになるのです。そこで霊医からの霊的エネルギーが、地上のヒーラーを介して患者さんに与えられます。その際、霊医のエネルギーに物質性が加わるため、１回目の霊医の治療では反応しなかった方も、治癒が引き起こされるようになります。

こうした想像を超えた霊界主導のヒーリングが“スピリット・ヒーリング”です。スピリチュアリズムが認める本物のヒーリングとは、このスピリット・ヒーリングのことです。今回もスピリット・ヒーリングを公開し、霊界主導の治療の現実を多くの方々に体感していただくことができました。




スピリチュアルヒーリング　スピリットヒーリング

公開ヒーリングの最後に、全員でシルバーバーチの祈りの朗読を聴きました。凛とした霊気が祈りの響きとともに会場のすみずみまで行きわたり、神と高級霊の存在を身近に感じ、これまで体験したことのないような深い感動を味わうことができました。参加者の誰もが神の愛に包まれていることを実感し、何度もその感動をかみしめているようでした。

私たち日本スピリチュアル・ヒーラーグループでは、今後もスピリット・ヒーリングを通して、霊界からの働きかけを多くの方々に知っていただきたいと願っております。

スピリチュアリズム・ビデオ&テープ ライブラリー

VIDEO&DVD

『地球人類の霊性進化の道 “スピリチュアリズム”』

ー霊的真理のエッセンス・真理編ー

ビデオ

（価格）

「真理編・前編」２時間テープ　１本……**2,000円**

「真理編・後編」２時間テープ　２本……**3,500円**

※ビデオは、VHSとS-VHSの２つのタイプがあります。どちらかをご指定ください。
S-VHSのタイプの方が、よりきれいに映りますが、専用デッキでないと再生できませんのでご注意ください。

DVD

「真理編・前編」
「真理編・後編」
＞ ２時間DVD３枚セット　（価格）
（合計５時間30分）……**5,500円**

※いずれも別途、送料がかかります。

C D

朗読CD

「スピリチュアリズム入門」　74分 CD　5枚……**3,000円**

※製作準備中

「続スピリチュアリズム入門」　74分 CD　7枚……**4,000円**

※製作準備中

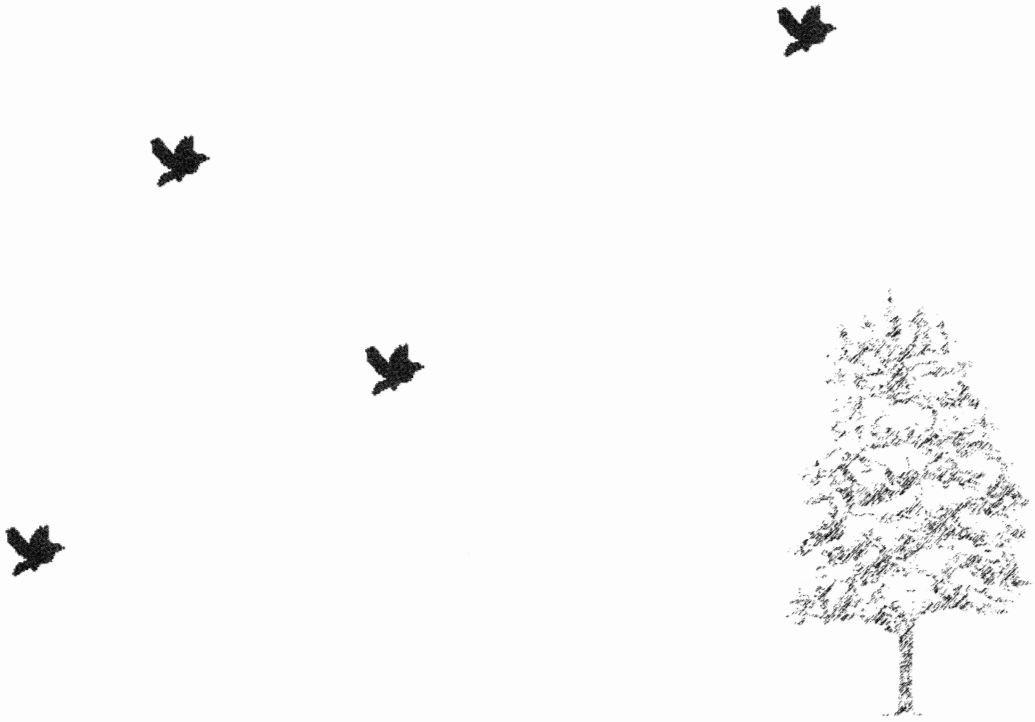
「500に及ぶあの世からの現地報告」

74分 CD　10枚……**5,500円**

※製作準備中

※いずれも別途、送料がかかります。

★朗読CDにつきましては、現在すべて製作準備中のため、欠品となっています。



書籍の「再版状況」についてのお知らせ

★しばらく在庫切れとなっておりました『スピリチュアリズム入門』（新版）が完成いたしました。

発行予定が大幅に遅れ、お待たせいたしました。この『スピリチュアリズム入門』（新版）の内容は７割程度、旧版と同じですが、文体・表現はすべて新しくなっております。スピリチュアリズム・高級霊訓のガイドブックとして、活用してくださることを願っています。

なお現在、『続スピリチュアリズム入門』（新版）の製作を進めておりますが、完成は３月頃の予定です。出来上がりしだい、ホームページを通じてお知らせいたします。お電話でのご予約は、お受けいたしております。

スピリチュアリズム・ライブラリー

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

◆スピリチュアリズム入門（新版・219頁）
ースピリチュアリズムが明かす心霊現象のメカニズム＆素晴らしい死後の世界ー

◆続スピリチュアリズム入門（256頁）（※現在、再版準備中）
ー高級霊訓が明かすー「霊的真理のエッセンス＆霊的成長の道」

◆霊媒の書（297頁）
スピリチュアリズムの真髄「現象編」
『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆霊の書（357頁）
スピリチュアリズムの真髄「思想編」
『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆500に及ぶあの世からの現地報告（改訂新版・437頁）
ーエクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活ー
『Life After Death』 ネヴィレ・ランダル著／小池 英 訳

◆マイヤースの通信ー永遠の大道（全訳）（271頁）（※現在、再版準備中）
『The Road to Immortality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆マイヤースの通信ー個人的存在の彼方（全訳）（304頁）
『Beyond Human Personality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆霊訓（完訳・上）『The Spirit Teachings』（225頁）
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

◆霊訓（完訳・下）『The Spirit Teachings』（260頁）
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチは語る（443頁）
『Teachings of Silver Birch』A. W. オースティン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓（272頁）
ースピリチュアリズムによる霊性進化の道しるべー
『A Voice in the Wilderness』 トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓（281頁）
ー地上人類への最高の福音ー
『The Seed of Truth』トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓 ー霊的新時代の到来ー 『The Spirit Speaks』（301頁）
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆スピリチュアル・ヒーリングとホリスティック医学（371頁）
ー霊的エネルギー療法の本質と将来の医学の方向性ー

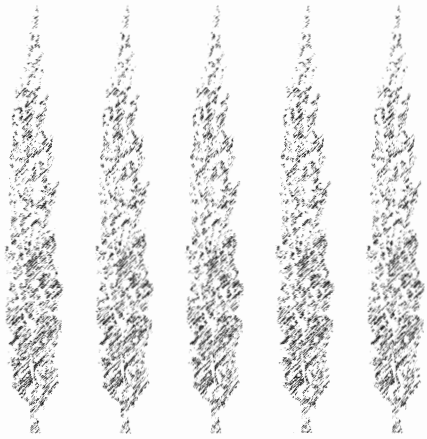
※日本スピリチュアル・ヒーラーグループ発行

明けまして、おめでとうございます。2009年の地球は、アメリカの政治・経済両面にわたる大きな動きの中から出発しました。言うまでもなくサブプライムローンに端を発した金融危機と、オバマ新大統領の就任です。

今、アメリカは世界恐慌へ突入するか、公的資金を注入してツケを先送りし借金大国になるか、という選択に迫られています。いずれの先進諸国も後者の方法を選択して、世界恐慌が起きるのを何とか防ごうとしていますが、どちらの道を選択しても、最終的にはほとんどすべての地球人類が、苦難の中に立たされるようになることは避けられません。危機はまだ始まったばかりで、さらに深刻な影響がこれから世界中を襲うことになります。日本経済も、その真っ只中に立たされることになります。

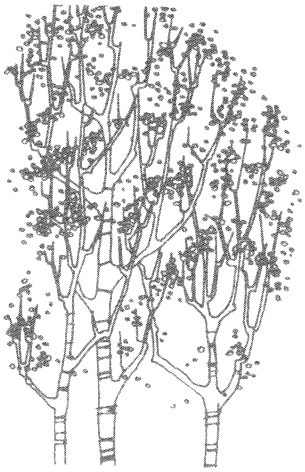
こうした事態を回避することがオバマ新大統領に期待され、選挙に大勝することになりました。今、アメリカの国民世論やマスメディアは、オバマ大統領が打ち出す対策を固唾(かたず)を呑んで見つめています。アメリカ国民ばかりでなく世界中の人々が、“チェンジ”を感じさせてくれるような大胆な政策を待っています。これまでのところは一方的にふくれ上がったオバマ大統領に対する国民の期待と理想化だけで事が進んでいます。もし今後、オバマ政権がこうした期待に応えることができなければ、早々に大きな失望を引き起こすことになります。実際には、その可能性の方が高いのです。

アメリカ大統領選は、民主主義がもたらす“衆愚政治”の熱狂が渦巻いた政治ショーでした。そこには地球人類の生き方の本質に迫るもの、地球上の問題を霊的次元にまで掘り下げて根本解決をはかる方向性は何ひとつ示されませんでした。前政権の金融政策の失敗を変更し、新たな経済政策を打ち出しただけでは、人類の霊的成長の歩みに根本的チェンジは起こりません。



世界中が恐れている“恐慌”とは、暴走した人間のエゴ的欲望が拡大させてきた経済活動が、限界点を超えて一気に破綻し、それと同時に自己矯正の方向に急激に舵(かじ)を切ろうとしている現象なのです。それは不摂生な食生活から発生した体調不良が悪化し、あるとき急激に病気を発症し、食べ物が喉(のど)を通らなくなるのと同じ状態です。経済恐慌の原因は、すべて人間の「物質第一主義」と「エゴイズム」にあります。それは、まさに自業自得と言うべきものなのです。大局的観点から見るなら、恐慌はエゴ的経済活動の自己浄化作用であり、その意味で恐慌を一方的に悪と見なすことはできません。それどころか恐慌は、今日までの人類の間違った方向性を正す善いチャンス、神の摂理による「真のチェンジ（変革・再生）」のきっかけと言えるのです。

今後、10〜15年間、地球人類はこれまで体験したことのないような暗い世界を生き抜いていかなければならないでしょう。“この世の地獄だ”という声が、先進国の至る所から上がることでしょう。そういう時こそ霊的世界の存在を確信し、この世が霊的成長のために与えられた一時的な生活場所であることを知っている“スピリチュアリスト”が、本物の光となって人々に希望を示していかなければなりません。どのような局面にあっても、神と霊界の前に正しく生きるなら、何ひとつ不安に思う必要はないことを世の人々に訴えていかなければなりません。「霊的真理」に基づく楽観性を持って、これからの難局に、ともに臨んでまいりましょう。



Spiritualism Circle

Kokoro no Dojo